御伽草子

一

東京帝國大學圖書之印
遠13
64/
2

△山津帯

御伽平家

二之巻

明治三十八年九月十一日購入

内改

道へ13
門
弗
巻 一

第一

目録

忠と孝と紙衣分け給はれし事

懺悔九いかの類ひ彼の時代の平氏若

主と親を一緒ひおくべき忠義

子孫あり欲ひ八月のとんあ親ひ恩

第二　多田の満仲の子に頼光と申す者あり。母は摂津の国の住人多田の蔵人の娘なり。父は源の満政と申す。母は摂津の国の住人多田の蔵人の娘なり。父は源の満政と申す。

第三　ある時、頼光の母、乳の人に抱かせて、頼光の形見とて、金元の太刀を持たせ給ひ、源氏の運い輝く事、世に伊豆の配所

一　忠と孝と伝説

孟子の語に、舜は、瞽瞍の子なり。瞽瞍、舜を殺さんとせしかば、舜、逃げ出でて、歴山に行きたりしが、歴山の名人なり。舜、耕作の時、象

けいの方ゟ〆てかそ平家ふそうられ兄義経を同おいたゞり
首と打きゝ伝代まで名のゝよごさん事ゝ愛念の彩ゝぐゝ先ゝさい
氏神八幡大菩薩ゝ弓矢ゝ家ゝ家ゝ
名をゝのゝ七代をいいゝて持ゝ世ゝ家とたゝゝ氏ゝ氏
亡ゝ。まゝと栄ゝ世ゝ門神ゝ。今彩彩ゝ絞ゝきゝ切。人ゝの毒蛇と
なゝて出ゝたゝのゝとゝきゝふゝゝ。蛇のゝとゝを七ゝまゝゝ。系結の事ゝと人ゝも
神ゝおゝいゝを付ゝまゝゝと。面ゝをい紅のゝゝ。眼ゝ。怪ゝの涙をゝゝゝゝゝ。
の刀と追ゝゝすゝでゝに絞ゝつゝきゝゝゝゝ。社壇のゝげゝゝ化ゝ
ゝゝる事ゝ。彩のゝゝにゝゝゝゝゝ。伝ゝのゝゝゝゝゝ。ゝゝ怪ゝゝゝゝ
ゝゝ。ゝゝ大弁の門ゝ絞ゝゝゝゝゝ

ありがたらうん
ありがのふくふく
なんのもの
かのれと
わりわ
こそこそ
わるる
花さんのうゑる
老人わらうんか
よるすぐうるさ
ろうとさ云
ろろろうんと
ちゆふ
陳年ろ女房
ろ腰ろ
ろくさのそさ
ろうとさろんろ
ゆきの
いとを
さうとろを
陳久ろ女房さの
ゆきのへぢり
付うりんとろ
ゆども
ぎーとろる
れねろ
ぎーとろ
ろんたのぢん
れねどろうわ
まろ
ろ腰わさよ
ろうさろ
元ゆの去れ
ろこいのりとろ入れ

なけるの人は程なく二条新大納言の家に出仕の侍の女切丸と云あり
ける。此侍は二条の内。殺切と云也。左右にて出仕の殺切と云て殺代武勇の
ほまれを引ける。かくのごとく侍男にて殺切と云名の名高きにより。殺切とい
へども。実は殺切にあらず。殺切とは殺代武勇の家名を継ぎ。殺代武勇の
名を継ぐは。殺代の先祖にて。殺代武勇と云は。殺切の子孫にて。殺代
武勇の先祖にて。殺代武勇と殺切とは。同名にて。殺代武勇は。殺切の
子孫にて。殺切は殺代武勇の先祖にて。殺代武勇と殺切とは。同名にて。
殺代武勇は。殺切の子孫にて。殺切は殺代武勇の先祖にて。殺代武勇と
殺切とは。同名にて。殺代武勇は。殺切の子孫にて。殺切は殺代武勇の
先祖にて。殺代武勇と殺切とは。同名にて。殺代武勇は。殺切の子孫

きづかひしを、ものがたりあべかりしかば、こゝろ
うがりてゝ、ものがたりせんとて、夫は子をあ
ぶなげなるさまにいひなして、たゞ系の仕と
ばかりいへば、妻は、なほ房の婦、年はいまだ乳母
めいて、たゞ系の仕と
ばかりいへば、妻は、なほ房の婦、年はいまだ乳母

うそをまるてはなれの男でぞらひとを拾ひうつれて
和方へ嫁へやられ姉ちやと竹でゐるのく果れそらく妹いとう
ひとの流ぐりの口牙。継子ぞ母とそなてひがみ者のごとぬひ
オにもぐ比しゆ和もゆうこねよ御あるいうぐして親姉をもとた。
家とうけ。今の浦めよそひしたよて面白くそんはい吉作不
面よ太こ和。御あやと仕あたるの沢なへふ切まひでゆ行きに出
もぞくるこなはやつそれ。家あるうこうれまひそな。神元にまあ
らて関ぞと姉ぐゆ付矣北ぐうそ。こは二移ぐひぞなへきこに出やた。
ほぐくきこの浦子系。あひもとこそひ一あるようれ。ぞ石ふ
ナこ比屋まで義れいぞ妹ぐれうの妹ぐ親ぐ思ひけて行くき
ねこぐぞれ妻ぐそれさい。あのこ面彩れよ。乳とうれさ乳の人。
浦めい乳母ぐあり。ようぞ浦ぐはすぐめくきいるれば浦子系

を彩こ浦方へまこいい出さるの。義れこの方でいついあれの浦りまこ
人のゆこゆされさゆ。あるこ浦氏れ行こ人こ生る時こと。こ浦ぐ
彩ぐるこ。今でいい浦子系の男と氏実ぐ。あれ。二は社での浦ぐはるる
いこ。きのこきのぐひをゆこさこは。今新妹ぐ行きこと。こ入。あの
ま妻でるいぞあれ。れまこそこ。ゼナれ行こいは稚ぐ。今日安手こく
といぞ浦耳の子浦の親。浦子系とそあこまあゆこ。子新の浦
一門方にこぐりこい男たぐ立ね出。彩れるれば面彩はいこ
いこるれあるほぐ彩人こ。こ浦の姉とれこ。妹とれぐ。今とこの海ろ
ま新れこおくるやま。パこ浦とめこ。こ浦ぐ。こ入。一表稚彩こか
らく表。イやるぐ人ぐやの書表ぐやの。ぞぐ。ぞこ。ぞこするい男をこ。ねと
いこるの浦ぐい男ろう。彩ぐ男ろやぐ。ぞ彩こいこ。ぞ彩。ぞこ。いこやか
らね浦。親兄弟ぐ人こ。ぞ彩れの。ま。こ。ぞ。ぞ。ぞ

わしをゑれよいたきれぬ。ゆるしてゑれ。それかゝ神人のそそみて神い婦ゞ四
郎ゝと紙のそゝれわゝいゝまゝいみゝみゝ。きゝてゝゝ番ゝの舞
ふゝゝゞられていゝ男ゞゝゝ。ゝゝゝ紙ゝもゝゝとゝゝゝゝゝゝゝ。
他所ゝゝれゝゝゝ。敷版と切てゝ孔ゝ舞ゝのゝひゝけゝゝゝゝ。ゝゝ
まゝゝゝ。お肌ゝゝゝ刀ゝゝゝ。サヤ婦ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

妹も姉の名指とおひやり。庄屋に添ひ乳。呼び分のことを知らず

二

乳母のあい通うる継母の胸れ火

是非とも世の家れとぞ。ニつよりつる姉れのつ〜ゐ。村れ一方い我儘ちゃ〜め
姉姫。なげさせてる子の指。雷やゆんだがんづきそ。ごとやら手れ指
た。新家の主人といふ。新と新ふ。ふさうぐ。ふりて。新のせたい。ふ
ぞ。ふ刀。逆ふ。ふ。ふ。

えばとて、はなはだ雷をきらうゆゑ、ことさら
と、懐中より毒薬を出し、呑んとせしが、
はのしたの信をぞ、門口にちらへ、
捕らへ、其者をたちまち縛りて、
入れ、ぬかるまいぞ、ひとへに細代の恩にて、
なくそなすべの運命ぞ、捕りて、
刀をわたんとの人、結つまりてわけざれば、
ふるひ、牙をかんでぞ、
さのみ、はたに、山京へ、
母、池の稼尼とやいふ者の、
出し、独りひ、
をとりしたりそよ、

つゝも、出をまいて、
年にあり、
も、
だつさざりけり、
の、
てす、
かりまつれ、
ありとも、
へや、
あり、
もて、
年、
は、
は、
は

とさりしにわれに其ものゝ流れ石はしてはなしとのしが今見はなしなる
いまゝこれ勢力の術とせしは。彼等の行て邪うる術藝とこのゝ
ゆゝ社人の術ありしなり。山門の大宮寺立て。その法はなしと法華せ
らるゝきは。表ゝ表ゝに及びがたし法華は世の証とのうれんる。
其の山門をとりしかの者ども。ものゝ上れるようてこがと
くも言上まで法華を抱えて。法華義理すりけこの大宮寺まゝ
とゆゝて。日吉山の中にて法華の大師をと七日法華でしかの者
と呪詛をしいよりて。日吉やせと業にて。このもようを
とげあされば又い才を懐ゝ。拾三月すゝて又牙の石出べきに。
いつゝ拾ゝの才うれば。そ武の者のまゝ世ぐさのくも称ぐと
申ねつて才そのゝれ世にあんとの平ね拾ゝやせと変てしは怨
をけゝさんものとゝ。祇園の一人今ようて。事勢の事宮獅田の

大宮司が姫の拾ゝゆゝうて。大宮寺の事はおろ安三〇丁の卯代年延せし。
今まの大宮法華勢とすれうて。法華義
勢。不義の法華勢ゝ色て宮寺と勢ものゝ
きておすれ然とけゝさんろゝ。公卿ゝ
男勢勢と無恥ゝ。ゝ然ゝ法華ゝ足法華ゝ
ゝれ。ゝゝ者ゝゝれんゝ。ゝ拾ゝの拾ゝ万初ゝふゝもつゝ
ゝ色法華ゝゝ法華ゝゝ法華ゝゝ
ゝ拾ゝゝ建立て法華ゝ。今勢勢とすれゝゝ
勢ゝゝ然ゝ法華ゝ法華ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ法華ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おそれてをがみたてまつるに、ものもいはざりけり。かの
みゆくるしいまを、ものをもいはずして、ただ我が恋いきてやさんをぞ、
ふりたる白髪、ばかりめぐみとうづびけるやさんの外にはなし。
ただ、まつもせに、今ぞ我と云ふ。くるしい。名あれば、報ずと、はかなき
てはなをけさまどのうちやおいて、母やぞ、つつ、数のたまうも。日
新の事とも、ものたまひて、消て、新さへおかれ、ものたまひ。
御菩提をつくりやう、今ぞ、はづ、問ふ、とみせてくれいせで、ものぞ、あ
いさんで、ものを、母はわすれ、と、家ぬけ、くはく、消て、ものひとかろ
う、ものたまひ、れすて、おをけうい、消ぬ、ものの、乳母ふかはぬ、袖
をひろへ、ものとゆせ、ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、
そのまくはせ、はまはゆせ、ものひ、ものを、ものを、ものを、ものを、
命とは、ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、

ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、

いのちを捨てたてまつりしに、後にこの報ひは現世我身の家業、
無業、今にいたるまで世間の一命を捨ひ、力を盗れぬ者と成て法
華経を一部家業に拾ひ、とけ、さとりの人、そもそもこれ
を悔ゆるに、何ぞ人間の中にいとまなきわれ、法華
経の五部と女のひがめる心、遂に法華経を捨て
給ひ、法華経の為に成て、法華の為に成てひろめ給ひ
の女房達に、ものしてしかるべき者、ぬけ出て、
まれ銭、うつれ、頻頻法華経に参詣して作善
他行してあらざれば、ずいぶんに成て、
きのうの今日、三度参りすぐして、
死ぬべしと、切てまいりんと、ひがごとやく我は死
云のなかりしかば、法華経の行者の身なり

よって出家せられ、法華経に入られ、法華経を
そこなわ、わたくしあるとおく、
ひとと、法華経の墓に行、あるとき、
歌と、京あるべき、墓を建て、
うけて、さきとどこほる、
と、食して、公と、
物あるべ、
時、ひそかに、法華経
切九の、
いひつべ、
いとみ、

三　ちごとして、

人の世衰いおごるゝ縄のごとく。家業ゝ
こそ。なれ。昔い法華まゐ家とて。
世わ〳〵よ。平治より。まゐ家い世に
い悪くなやされ。けり。右兵衛佐頼
あづけられ。おりまし。法華の行
まゐ。まゐ。十三。出て。後世。
まゐ。の。世。池の。禅尼。頼ゞ。命。
とり。たゞけ。れと。世。の。石。祈ゞ。
法。世。池。

照蒼盛月院

御ぞうしをとりて、ぜんぜんとよむ。その中宮様、
御のたまはくとは、なにをかはかれ日よりぞ。
ぞうしとのまれゆゑに、そもそも今元のおん御ぞうし
をれば、なほ様の御まのりをとりひゆゝせてなんとけうとうあげめまい
てとうるぐ。まことに世宝この事にうべ。法皇の源氏いづれうるはす
ざんぞうなとけうれうた。法皇めぞうぞ。あつひうく。
世威勢つよいで。御の思ひ入さつふべき。御尼れいおろいかう
今日までぞ。れひうをとり行あさいてつのふいかるをけまじ。
家の中御行。をたに御ひうさずば。初夏の中をうべ。
よい御ぞうれまつのぞ。御やおぐ。おをうのぞをつうれさぶひう
と。ををのかをるぐ。出をまいあでもいらぶ。御うをいあれまい。歌数
しといふ。巻のうをとをれをされぞうのをおをさずをけをふうと。

怪うぐ。おをひいねまいぞをれ中をの事計とををて。御れと
涙をれぞきおをうれのあやうをいを。命ををうをひわそぐまを
ぬうをおをう紀のうをとをおをきうぐ。人倫のをとをを中をとを。おうをせば
世をいをゆをうをををいをぶぐ。事ぞを中をををぐ。中をを悔わそぐさ
まん。御尼れの中経をかおを。
まをぶぞを。御尼をの中。今日ぐ御ふうをうををしを。
おしををとをれをうををを

豊臣秀吉ゴロ、ヲ、ヲ、ヲ

武具とあつめ給ひて。御紙を作せ。ほく海でも罷をたかごろも
おさめんとおもはれし。二世の附よりもて。藤橋といふ百姓一揆とお
こり。ホカ作をうんどとおそれ。行ろ〳〵天下をくつがへせり。只関東の活
れ。ねこいぬくよ大名の法令の吾無にはるとなれ。ひくいがくらに
配所のやよ。お氣と労〳〵ものうあ。大名にのうあ人ばさもあるべ事出
けていぬ。伊豆国へおづすべと。別者豆とおそ。伊平素ろ藤よ伝渡
され。ホ豆り豆り物ぐ小藤と。ろくられろ。後て助りがて死命と助り。ろり
も家人多くさ東国の方へおづされ。ろ。ほ元寺代の友切丸と。音に名
切丸と源為義にあたよりて。海の精高豊の孫。為義の孫九よ
ほ豊とうと。源氏の方に寄〳〵き国へ。主源の指図。悪く紙の
精の名ばざていひおづ。ろハ八橋大年。源氏再興の出方保とな
りぐ。ろい合され。ほり

二之巻終

好文堂